



発行者 島根県健康福祉部  
医療政策課医師確保対策室

### 今回の紙面

- ◆ 地域医療最前線 NO.84 「地域で育つ医療人～笑顔が一番～」  
《津和野共存病院 副院長 飯島 献一》
  - ◆ 研修医のページ NO.61 「江津の地域医療」《済生会江津総合病院 医師 佐々木 拓志》
  - ◆ 看護師さんのページ NO.62 「患者さんや家族の思いに寄り添った多職種での支援」  
《島根県立中央病院 入退院支援・地域医療連携センター長 今岡 桂子》
  - ◆ 赤ひげ先生「地域医療への道のり～その3」《公立邑智病院 整形外科部長 保坂 聖一》
  - ◆ 事務長さんのページ「島での安心な生活を支える医療」～つながりを築く～  
《海士町国民健康保険 海士診療所 事務長 浜崎 礼子》
- ◆ 編集後記



## 地域医療 最前線 No.84

### 地域で育つ医療人 ～笑顔が一番～

津和野共存病院  
副院長 飯島 献一

私の出身は、出雲市大社町鷺浦です。生まれた時は診療所の医師がいましたが、私が小学生の頃に不在となり無医地区となりました。鷺鷯小学校、鷺鷯中学校を卒業し、鷺浦診療所で医者になりたいと思いい大社高校から島根医科大学に入学、8期卒で平成元年5月に第三内科に入局しました。賢いだけでは医者はずとまらない、患者さんのために尽くせる医者になりたいという思いはだれにも負けないつもりで、平成の赤ひげを目指して患者さんに向き合いました。1年半研修医後、和歌山日赤麻酔科で救急の研修を半年間して、医局人事で津和野共存病院に平成3年10月に初回の赴任をしました。当時10数名の医師が医局で一緒に過ごしていましたので、救急外来では外傷の処置は外科、肩の脱臼は整形外科、小児もまずは自分で診察して困難ケースは小児科医に相談できました。私が住んでいる津和野町内の東1自治会の皆さんもとても好意的で、地域で医療に携わっているという実感も得ることができました。30数年前のこの津和野での医師としての経験が地域医療を目指

す私にとってかけがえのないものとなり、平成20年5月より津和野共存病院副院長として津和野町での3回目の勤務をしています。

今は私の中では、地域医療とは、「住み慣れた家、住み慣れた地域で最期まで安心して暮らせるまちづくり」だと思っています。津和野町は、大正8年に日本で初めて農業組合による診療所を開設された農村医療の先覚者大庭政世氏の生まれ故郷で、医療事業を産業組合の行う生産事業の一部として開始されました。平成24年が地域包括ケア元年と言われていますが、まさにこの原型が構築されており、同年に地域包括支援センターと地域医療対策室が医療対策課として津和野共存病院内に移転しました。この地域包括ケアシステムを念頭に置きながら、認知症施策と看取りの文化の構築をテーマに地域医療に携わり、医療人を地域で育てることを目標に学生や研修医の指導にも携わってきました。患者さんにとっては医学士も研修医も院長も同じ医師で



津和野町地域包括の仲間たち  
(医師、保健師、社会福祉士：農福連携)



橋井堂の仲間たち  
(医師、看護師、医療技術職、MSW、研修医、医学生)

令和4年7月から須川公民館で巡回診療開始、オープンセレモニーがカレンダーになりました(須川地区は大庭政世氏の生地)



す。外来、入院、訪問診療、巡回診療、訪問看護、地域包括支援センターなどで地域住民である患者さんを通じて多職種と連携し、その中で、まずは地域を知る、そして、多くの人と交流し、医療人としての技量、知識を地域住民の皆様に提供し、他方、多くの人生経験や生きるすべを学ぶ姿勢も養ってもらうようにしています。

地域づくりを学ぶ中で、土の人、風の人、水の人という考え方を知りました。島根県出身の医師としての私は島根に居続け、しっかりと根を張り、活動しつづける存在の土の人、津和野町で働く私は、出雲市大社町鷺浦から来た、津和野に種を運び、刺激を与える風の人という立場かなと考えました。そして、私とその土地に寄り添い、種に水をやり続ける存在である水の人と考えると鷺浦と津和野町と両方の存在でかわりを持つていけるのではないかと思っっているところです。これからも、地域に出て、暮らしのなかで支え支えられる双方の関係を築きながら、皆さんの笑顔を引き出せるような地域で育つた医療人として日々精進していきたいと思います。

## 江津の地域医療

済生会江津総合病院

医師 佐々木 拓志



済生会江津総合病院循環器科の佐々木拓志です。よろしくお願います。私は島根県益田市で生まれ、小学校・中学校時代の9年間を江津市で過ごしました。その後、島根大学医学部へ入学し、卒業後は益田赤十字病院で2年間初期研修を行い、島根大学医学部附属病院循環器内科へ入局、2022年に済生会江津総合病院へ赴任し現在に至ります。今回は江津での地域医療を中心に伝えてできればと思います。

江津市は人口約22,000人で65歳以上の割合が約39・9%と、島根県の中でも高齢化率が高い地域となっています。実際の診療では循環器疾患の方だけでなく、誤嚥性肺炎や尿路感染症等の感染症、糖尿病、脊椎圧迫骨折など様々な疾患の方の診療をする機会が多くあります。心不全患者さんの場合でも、80歳以上の高齢者の割合が多く、糖尿病や慢

性腎臓病など併存疾患がある方がほとんどで、総合的な視点や考え方が重要であると痛感しております。当院は医師減少に伴い専門科の数も減っており、全科の先生方が幅広く診療を行っている現状があります。私も日々様々な疾患について学び、当院の先生方や外勤で来ていただいている各専門科の先生方にもご指導いただきながら診療をしています。また、当院は急性期病棟から、地域包括ケア病棟、療養病棟もあり、急性期から慢性期、終末期まで様々な患者さんと関わる機会があります。疾患も多岐にわたるため大変な面もありますが、それ以上に大きなやりがいを感じております。

次に私が現在携わっている活動についてです。心不全の多職種・地域連携や、ICT・ASTの活動、災害医療（DMAT）、緩和ケア・意思決定支援等について日々学びながら活動しています。いずれもこの地域での診療において非常に重要なことであると感じ、今後も積極的に取り組んでいきたいと考えています。心不全の多職種・地域連携では、再増悪を繰り返している方や生活にサポートが必要な方など高齢の患者さんが多いため、医師だけでなく、看護師、栄養士、薬剤師、理学・作業療法士、言語聴覚士、MSWの方等、院内の多職種との連携だけでなく、開業医の先生方や介護施設、デイサービスや訪問看護のスタッフの方々など院外の関係機関とも連携を強めることで、地域で一体となり心

不全の増悪予防や増悪時の早期発見・早期治療介入を目指しています。多職種・地域全体での連携を強化するため、看護師さんを中心に長年かけて改良しながら作成された心不全地域連携パスや、前任の先生が導入された心不全ポイントなど共通の指標を用いて情報共有や連携強化に努めています。また、心疾患に限らず、高齢の方が多かった終末期の過ごし方について考える機会も多く、緩和ケア・意思決定支援も非常に重要であると感じています。感染症については、通常のICT・ASTの活動に加え、COVID19の流行があり初めての経験も多く、戸惑うこともたくさんありましたが、多くの教訓を得ることができました。この地域に来て総合的な力の重要さを強く実感し、大変な面もありますが様々な場面でやりがいを感じ日々過ごしています。



## 患者さんや家族の思いに寄り添った多職種での支援

島根県立中央病院  
入退院支援・地域医療連携センター長

今岡 桂子

地域関係機関の皆様方には、平素より当院との様々な連携や教育等に

つきまして、ご指導ご高配を賜り心より御礼申し上げます。

入退院支援・地域医療連携センター（以下、連携センター）は、地域医療連携を担う病院長直属の組織です。地域包括ケアシステムの推進と急性期病院の役割機能を発揮するため、2015年4月に組織改編し設置されました。連携センターには、入院前の支援を担当する「入退院支援スタッフ」11名、退院調整や医療福祉相談、地域医療連携を担当する「地域医療連携・医療福祉相談スタッフ」24名、センター長補佐の医師2名（兼務）と事務職員1名（兼務）がいます。

入退院支援スタッフは、入院治療が必要となった患者さんに必要な物品や身体と心の準備についてお伝えする役割を担いますが、同時に患者さんの「思い」をお聞きしています。入退院を繰り返す患者さんから「治療の合間で（最期に）どうしても県外の思い出の場所に行きたい」と聞き、医師に相談し入院日を調整したこともあり。また、入院前の面談で心配な点があれば地域医療連携・医療福祉相談スタッフのMSWや退院調整看護師と情報共有し、支援のタイミングを逃さないように連携しています。

近年、高齢者夫婦世帯や独居高齢者世帯の患者さんが多くなっています。そのため新たな医療処置や介護量の増加により、介護する家族の暮らしが変化したり住み慣れた生活の場から退院することが困難になる場合



も少なくありません。転院しての療養や自宅での療養、また自宅での看取りなど、本人あるいは家族の希望を大事にすることが退院を支援するスタッフの共通の思いです。「孫の結婚式に間に合うように退院したい」「海の見える家で過ごしたい」など一人ひとりの思いを退院前カンファレンス等で地域の支援者と共有しながら支援を繋いでいきます。

ここ数年で、当院の外来担当医師や看護師から、外来患者さんへの支援依頼や相談が増えてきました。相談内容は「ずっと当院に通院されていたが、病状の進行とともに通院が困難になってこられた。訪問診療や

訪問看護に繋がりたい」というものです。長らく患者さんや家族の様子を見てきた医師の、患者さんや家族の通院の負担をなくし診療を継続したいという思いを受け、MSWや退院調整看護師は、訪問診療や訪問看護を選定し、かかりつけ医との連携を図る調整に向けて速やかに動き出します。当院の医師は、選定した訪問看護やかかりつけ医と一緒に患者さんがどう暮らしたいか、家族がどう支えたいかを繋ぐ「外来在宅共同指導」を実施する機会もあります。

診療予約や検査予約等の地域医療連携業務や地域関係者との対応など多くの事務的業務は信頼のおける事務職員がきっちりと行ってくれています。私は、地域関係機関の方々や上司、同僚、スタッフに支えられ連携センター7年目となりました。患者さんが望むその人らしい生活の場に安心して戻ることはいかに支援できるか、今後も地域の方々と一緒に実現に向けて努力したいと考えておりますので、引き続きご支援とご協力をお願いいたします。

## 赤ひげ先生

### 地域医療への道のり、その3

公立邑智病院

整形外科部長 保坂 聖一

6月末までに候補の3病院（東北地方の2つの公立病院、公立邑智病院）とのオンライン面談は終了し、

現地で病院見学となりました。7月に東北地方の2病院を1泊2日で巡り、9月に公立邑智病院を1泊2日で見学しました。どの病院も関東からは遠方で、コロナ禍もあり、事前に得られた情報は民間サイトで問い合わせた内容やオンライン面談の時に得た内容に限られました。地方自治体病院の多くは財政が厳しいことは聞いていたので、病院の経営状況や地域における立場も気になりました。公立病院の場合、自治体のホームページに財務状況（予算や年間の収支）や今後の統廃合等の医療計画が示されていることが多いので事前

に参考にしました。実際の見学は先方も業務中のため大抵午後からとなり、院長と事務長に挨拶して病院の概況を伺い、院内見学という流れでした。私としては各地域の整形外科診療がどんな状況なのか最も気になりましたが、現地の整形外科医に話を聞くのは時間的制約もあり難しく、情報は限られました。

私は地域でも何とか手術は続けていきたいと考えていましたので、特に手術体制については詳しく聞きました。病院にとっては地域への貢献や経営を考えれば、手術はやって欲しいものだと思いますが、設備や器械等ハード面が最低限整っているか、助手や手術室看護師が確保できるか、地方では麻酔科医の確保が難しいことがあるので麻酔体制についても確認しました。やはり、看護師や麻酔科医など人的資源の確保が厳

しい病院が多かったです。

当然給与が気になる方も多いかと思いますが。医療過疎地では給与が高く設定される傾向があるようですが、公立病院では給与体系にあまり大きな差はありませんでした。むしろ各種手当や当直の回数で給与に差が生じてくるかと思えます。昨今の働き方改革の問題もありますし、特に当直については給与面だけでなく生活面にも影響しますので、しっかりと確認した方がよいと思います。ちなみに邑智病院には入院患者数や手術件数に応じた診療実績手当がありました。

住環境等生活面についても可能な限り聞き、医師住居があれば見せてもらいました。かなり老朽化していたり、長期間使用されていない住居もありました。気になった場合はリフォームしてもらえるか、近隣に病院契約の賃貸住居があるか等の確認も必要と思われました。

邑智病院は一番遠方ということもあり、1泊2日の日程で比較的時間に余裕がありました。鳥根県の医療担当者とも面談できましたし、院内各部署で担当者に話を聞くことができました。手術室にも入らせてもらい、器械を見せてもらったり、看護師から話を聞きました。医局で総合診療科の医師と話したり、当直室まで見せてもらったのはよかったです。医師住居も見せてもらいましたが、一番新しく整っていました。

3病院の見学で改めて感じたのは、1回の見学だけで病院を把握

するのはやはり難しいということですが。事前に確認できることはリサーチしておいて、現地では業務を中心に少し踏み込んだ内容を確認できるとよいと思えました。また、院長や事務長の話だけでなく、現場の方の話はやはり貴重だと感じました。



## 事務長さんのページ

「島での安心な生活を支える医療」つながりを築く

海士町国民健康保険 海士診療所

事務長 浜崎 礼子

海士町は島根半島の沖合約60kmに浮かぶ隠岐諸島のひとつ「中の島」

にあり、周囲89・1kmほどの小さな島です。令和5年5月現在の人口は2,266名(1,287世帯)で、高齢化率は39・4%と高率ではあります。近年「大人の島留学」などをきっかけに若者の移住等が増加し、農業、畜産、漁業やいわがきの養殖など多くの一次産業や観光業にかかわり活気ある島になっています。このような島の中で唯一の医療機関が当診療所であり、医療のすべてを担っています。

歴史的には、平成6年に島内にあった4つの診療所が統合し、医師3名、看護師7名、事務職員4名でスタートしました。現在では、常勤医師2名、看護師7名、臨床検査技師1名、リハビリスタッフ4名、事務職員5名で運営しています。また、精神科、整形外科、眼科は、隠岐病院、玉造病院、松江赤十字病院から応援をいただき月1〜3回診療しています。そして、週2回の外来診療および月1回の日当直に、隠岐島前地区の基幹病院である隠岐島前病院からご協力をいただき、診療連携が更に強くなりました。無床診療所である当院にとっては心強いものとなっています。

業務内容は、乳幼児から高齢者までの一般外来のほか、往診、高齢者施設の回診、学校健診、予防接種全般など多岐に渡り行っています。緊急時にはヘリコプターや船舶による救急搬送の業務も加わります。そして在宅での看取りやエンゼルケアも積極的にを行っています。私たち医療

者も島の住人であり、患者様とは家族のような心持ちで接しています。小さなコミュニティですので、お互いの顔や名前、住んでいるところ、生活スタイルまでわかり信頼関係が築きやすいのが特徴です。更に、しまね医療情報ネットワークシステム(まめネット)の在宅ケア支援サービスを活用し、高齢者が安心安全に暮らすことが出来るように診療所、高齢者施設、役場、地域包括支援センターが連携し支援しています。町内70歳以上の高齢者を対象にまめネットの加入を勧め、現在、約8割の方が加入しています。高齢者施設の職員からは、入所者の日々の状況が細かく伝えられる他、デイサービス利用者の様子や自宅でのトラブルや困りごとについても情報

を共有しています。医療・介護・福祉・保健が一体となつて対応し、タブレット端末ひとつで画像も送れることから、患者様にとってもスタッフにとってもストレスなく、顔の見える近さに情報の速さが加わり、スムーズな体制が構築できています。また、定期的にも職種が一同に集まり「地域ケア会議」を開催し、困難事例や地域課題について話し合いを行っています。多職種がチームとなり、問



地域ケア会議

題を自分事ととらえ解決に導いていきます。これらの方法により、個人の特徴や思いを尊重して家族のように寄り添いながら、誰もが住み慣れた場所です。安心して自分らしく暮らすことができるよう、近くて温かい人とのつながりを大切に今後も島の医療を継続して参りたいと思

## 編集後記

『島根の地域医療』第79号をご覧いただきありがとうございました。また、お忙しい中にもかかわらず執筆いただいた皆様、ありがとうございました。島根県HPでは、令和5年5月1日現在の医療機関の医師募集情報を掲載しています。詳しくは、

<https://www.pref.shimane.lg.jp/medical/kenko/iryu/ishikakuhotaisaku/isi-kyujin.html>

または、「島根の医師確保対策」で検索、ご覧ください。